# タイプA行動パターンの親子間での類似性

## －2つの調査結果から－

大芦　　治・山崎久美子*

倉敷芸術科学大学教養学部

*東京医科歯科大学教養部

（1997年9月30日　受理）

タイプA行動パターン（以下，タイプAと略す。）の発達に関する研究は，通常，家庭における両親と子供の関係の分析をその中心に据えている。さらに，これらの研究は，①両親の養育態度が子供のタイプAの発達に与える影響を検討した研究（たとえば，Blaney, Blaney &, Diamond, 1989；McCranie & Simpson, 1986；Yamasaki, 1990）と，②親子間のタイプAの類似性からタイプAの発達のプロセスを想定していこうとする研究（たとえば，Matthews & Krantz, 1976；Yamasaki, 1994）の2つに大別できる。

これまで，筆者らは主として①の両親の養育態度が子供のタイプAの発達に与える影響に関して検討を重ねてきた（大芦，1995；大芦・岡崎・山崎，1996など）が，②の親子間でのタイプAの類似性については考慮を払ってこなかった。しかし，タイプAの発達仮説の1つとして子供が親のタイプA行動をモデルとして学習するというモデリング説が有力視されている（たとえば，Matthews, Stoney, Rakaczky, & Jamison, 1986）ことを考えれば，親子間のタイプAの類似性を顧慮せず，タイプAの発達的研究を進めてゆくことは十分とはいえない。

そこで，本稿では，これまで筆者らが実施した2つの調査と同じ被験者を対象として親子間でのタイプAの類似性を検討し報告する。

今回分析された調査の対象は，（1）大芦（1995），大芦・岡崎・山崎（1996）の研究の被験者，（2）岡崎・大芦・山崎（1995）の研究の被験者にそれぞれ該当する。なお，本稿では，便宜上，前者を調査Aの被験者，後者を調査Bの被験者とそれぞれ呼ぶ。

## 方　法

被 験 者

調査A；東京近郊の3つの大学の大学生276名（男子　147名，女子　129名）とその両親（父親276名，母親276名）で，合計828名。父親の平均年齢は50.21歳（SD＝3.48），母親は46.92歳（SD＝3.88）である。

調査B；東京近郊の3つの大学の大学生353名（男子　222名，女子　131名）とその両親（父

親353名，母親353名）で，合計1059名。父親の平均年齢は50.99歳（SD＝4.17），同じく母親は47.95歳（SD＝3.66）である。

なお，本稿では，大学生の被験者を「子ども」と称するが，これは，父母に対する子どもという意味であって，幼児，児童などをさしていうわけではないことを明記しておく。

調査項目

調査A；この調査では学生および父母のタイプAを測定するための尺度としてタイプA行動パターン評価尺度（山崎・大芦・塚田，1994）を用いた。この尺度は①「攻撃性を伴った話し方」（以下，「話し方」と略す。），②「敵意を伴った仕事熱心」（以下，「仕事熱心」と略す。），③「情動性」の3つの下位尺度から構成されている。各下位尺度の項目数は，「話し方」が9項目，「仕事熱心」が4項目，「情動性」が2項目で合計15項目である（付表1参照）。

調査B；一方，調査Bでは調査Aで用いられたタイプA行動パターン評価尺度の改訂版（岡崎・大芦・山崎，1995；以下「改訂版尺度」と略す。）が用いられた。この尺度は①「気性の激しさ，短気，それに伴う話し方」（以下「短気と話し方」と略す。），②「実直さ」，③「時間的切迫感」の3つの下位尺度から構成されている。各尺度の項目数は「短気と話し方」の下位尺度が13項目，「実直さ」が9項目，「時間的切迫感」が3項目，合計25項目である（付表2参照）。

## 手続き

調査A，調査Bとも他の研究と同時に複数の質問紙を小冊子に綴じて，父母の分も含め学生に配布した。子どもは自宅に持ち帰り，子ども自身，および，父母はそれぞれの該当する部分を自記式で回答した。なお，回答の順序は子ども，父母のいずれから記入してもよいこととし，特に指定はしなかった。子ども，父母のすべての箇所が記入された後，子どもを通して回収された。

## 結果と考察

質問紙の信頼性

調査Aで用いたタイプA行動パターン評価尺度，および，調査Bで用いた改訂版尺度の信頼性係数（クロンバックの$\alpha$係数）を，父，母，子どもの別に，表1,表2に示した。タイプA行動パターン評価尺度について述べれば（表1），下位尺度「話し方」以外の尺度においてはあまり高い値とはいえない。しかし，この値は先の調査結果（山崎・大芦・塚田，1994）と同じ程度の値であり（3つの下位尺度の順に.81；.57；.51），やむ得ない。分析結果を解釈するに際しては尺度の信頼性に問題があることを念頭に置く必要がある。

一方，調査Bで用いられた改訂版尺度についてであるが（表2），先の調査結果（岡崎・大芦・山崎，1995），の結果，「短気と話し方」.844,「仕事熱心」.748,「時間的切迫感」.729と大き

な差はない。

表1　信頼性係数（調査A）

| | 「話し方」 | 「仕事熱心」 | 「情動性」 |
|---|---|---|---|
| 父　　親 | .82 | .55 | .49 |
| 母　　親 | .79 | .65 | .50 |
| 子　ど　も | .80 | .60 | .49 |

表2　信頼性係数（調査B）

| | 「短気と話し方」 | 「実直さ」 | 「時間的切迫感」 |
|---|---|---|---|
| 父　　親 | .87 | .72 | .71 |
| 母　　親 | .83 | .77 | .75 |
| 子　ど　も | .83 | .67 | .76 |

タイプAの親子間での類似性

タイプAの親子間での類似性を検討するために，調査A，調査Bともに子どものタイプAの得点と父親，および，母親のタイプAの得点との間で，各尺度の下位尺度ごとに相関係数を算出した。なお，相関係数は，これまでのタイプAの発達的研究の多くが性差を報告していることから（詳細は，大芦，1997　を参照。），男女別に算出した（表3から表6。）

算出された相関係数の値はいずれも低く，比較的高いものでも.3程度にすぎない。従って，まず，親子間でタイプAの類似度が高いということは断定できないことがわかる。しかし，たとえば，幼児とその両親のタイプAの相関係数を算出したYamasaki（1994）の研究では，相関係数の値は有意なものでも.2程度にとどまっている。また，Matthews & Krantz（1976）は，本研究と同様に大学生とその両親間のタイプAの相関係数を算出しているが，そこでも相関係数の最大値は.45であり，有意な値でも大部分は.3程度にとどまっている。したがって，本研究の結果もこれらの範囲内におさまるものであり，格別に低い値とはいえない。そもそも，本研究で主に念頭に置いているモデリングの要因の他にも，養育態度，社会環境，あるいは，遺

表3　調査AにおけるタイプAの親子間での相関係数（男子；N＝147）

| | 子ども | | |
|---|---|---|---|
| | 「話し方」 | 「仕事熱心」 | 「情動性」 |
| 父親 | | | |
| 「話し方」 | .12 | −.06 | −.09 |
| 「仕事熱心」 | .01 | .22** | .17* |
| 「情動性」 | −.13 | .01 | .17* |
| 母親 | | | |
| 「話し方」 | .13 | .11 | .03 |
| 「仕事熱心」 | .07 | .25** | .04 |
| 「情動性」 | .13 | .05 | .26** |

注）＊＊＊　P＜.001；＊＊　P＜.01；＊　P＜.05

表4　調査Aにおけるタイプ A の親子間での相関係数（女子；N＝129）

| | 子ども | | |
|---|---|---|---|
| | 「話し方」 | 「仕事熱心」 | 「情動性」 |
| 父親 | | | |
| 「話し方」 | .19* | .07 | .12 |
| 「仕事熱心」 | .04 | −.01 | .09 |
| 「情動性」 | .08 | .02 | .25** |
| 母親 | | | |
| 「話し方」 | .31*** | .23** | .11 |
| 「仕事熱心」 | .17* | .21* | .16 |
| 「情動性」 | .10 | −.03 | .20* |

注＊＊＊　P＜.001；＊＊　P＜.01；＊　P＜.05

表5　調査Bにおけるタイプ A の親子間での相関係数（男子；N＝222）

| | 子ども | | |
|---|---|---|---|
| | 「短気と話し方」 | 「仕事熱心」 | 「時間的切迫感」 |
| 父親 | | | |
| 「短気と話し方」 | −.01 | .14* | −.02 |
| 「仕事熱心」 | .03 | .14* | −.01 |
| 「時間的切迫感」 | −.11 | −.02 | −.01 |
| 母親 | | | |
| 「短気と話し方」 | .32*** | .11 | .02 |
| 「仕事熱心」 | .10 | .05 | −.02 |
| 「時間的切迫感」 | .08 | .04 | −.01 |

注）＊＊＊　P＜.001；＊＊　P＜.01；＊　P＜.05

表6　調査Bにおけるタイプ A の親子間での相関係数（女子；N＝131）

| | 子ども | | |
|---|---|---|---|
| | 「短気と話し方」 | 「仕事熱心」 | 「時間的切迫感」 |
| 父親 | | | |
| 「短気と話し方」 | .00 | −.10 | .10 |
| 「仕事熱心」 | .18 | .14 | .07 |
| 「時間的切迫感」 | .03 | .01 | .05 |
| 母親 | | | |
| 「短気と話し方」 | .23** | −.00 | .04 |
| 「仕事熱心」 | .06 | .30*** | .03 |
| 「時間的切迫感」 | .05 | .06 | .13 |

注）＊＊＊　P＜.001；＊＊　P＜.01；＊　P＜.05

伝などといった様々な要因がタイプ A の発達に関わっていることは明らかであり（タイプ A の発達の諸要因については山崎，1995を参照。），分散の大部分が説明可能な相関係数が得られる

はずがないのである。

次に，相関係数のパターンを子どもの男女，父母別により詳細に検討してゆく。

まず，「父親と男子」の関係であるが，調査Aでは，父子間の「仕事熱心」および「情動性」が有意になっているほか，父親の「仕事熱心」と子どもの「情動性」の間の相関係数も低いが有意となっている。ついで，調査Bでは「仕事熱心」あるいは「短気と話し方」などに関連して有意な相関係数が得られているが，値は極めて低くあまり積極的な関係を認めうるものではない。従って，まず，父親と男子の間での類似性はかなり低いと考えられる。

次に，「父親と女子」の関係であるが，調査Aでは「話し方」および「情動性」の相関係数が有意な値となっているが，調査Bでは有意な相関係数は得られていない。ここでも，類似度は低いように思われる。ちなみに，山崎（1995）は，タイプAの類似性を検討した研究を展望し，「父親と女子」間の類似が見られることはほとんどないと述べている。

今度は，「母親と男子」の関係であるが調査Aでは母子間の「仕事熱心」「情動性」，調査Bでは母子間の「短気と話し方」で類似が認められる。ただ，調査Aの「話し方」の下位尺度と調査Bの「短気と話し方」の下位尺度は，その項目の多くが重複している（付表1,付表2を参照）にもかかわらず，調査Bのみ有意な相関が得られている理由は明らかではない。また，同様に調査Aの「仕事熱心」と調査Bの「仕事熱心」もかなりの項目の重複が見られるが，調査Aでは有意な相関係数が得られながら調査Bでは関係が見られないという結果も，その理由は分からない。

さらに，「母親と女子」の関係であるが，調査Aでは母子間の「話し方」，「仕事熱心」，「情動性」のそれぞれで有意な相関が得られているほか，子どもの「仕事熱心」と母親の「話し方」間，子どもの「話し方」と母親の「仕事熱心」間でも低いが有意な相関係数が得られている。また，調査Bでは母子間の「短気と話し方」，および，母子間の「仕事熱心」で有意な相関が得られている。前述したように調査Aの「話し方」と調査Bの「短気と話し方」，および，調査Aの「仕事熱心」と調査Bの「仕事熱心」の各尺度間では項目の共通性が高いことを考えれば，この結果は調査A，調査B間でも割合一貫したものと考えられる。

以上の結果をやや強引ではあるがまとめてみれば，父親と子どものタイプAの類似性は男子，女子ともにごく若干認められるだけで，全般に低いものといえよう。一方，母親と子どものタイプAの類似性は女子では比較的はっきりと，また，男子でも十分とはいえないまでも認められる。

さて，以上の結果をモデリング説の立場から説明してみるなら，以下のようなことがいえるのではないだろうか。すなわち，我が国において一般に父親は母親に比べ子どもと過ごす時間が短いことを考えると，父親が仮にタイプAであったとしても子どものモデルになる可能性は母親よりも低くなる。従って，子どものタイプAの発達のプロセスの1つとしてモデリングによる観察学習が考えられるとしても，それは，主として母親をモデルにした観察学習となる。さらに，モデルが主に母親ということになると，母親の行動をそのまま模倣することが容易な

女子において観察学習がより積極的に行われることとなる。本研究において，類似性が比較的一貫してみられたのが母親と女子の間においてであるという事実はこの推測に合致する。

しかし，以上の見解は，モデリングのモデルとなるのは主として父親という説（たとえば，Bracke，1986）や，また，モデリングによってタイプAを身につけるのは主として男子に限られるという説（たとえば，Matthews, Stoney, Rakaczky, & Jamison，1986）とは一致しない。ただし，これらは主に欧米での結果であり，我が国が欧米に比して母子一体を望ましいとする傾向が強い社会である（柏木，1993）ことを考えれば，本研究のような結果が見られたことに不思議はない。

なお，本研究以外で親子間のタイプAの類似性を検討した我が国の研究としては唯一のものであるYamasaki（1994）の研究では，親子間で類似性が認められたのは「父親－男子」「母親－男子」の関係であり，本研究の結果と一致しない。しかし，この研究は幼児を対象としており，本研究のように青年期の者を対象としているわけではない。発達段階が異なれば，親から受ける影響のパターンも異なることも十分予想されるのである。ただ，現段階では，それを裏付けるだけの資料がないので，これ以上この議論に深入りしても無意味であろう。

つぎに，調査Aの「情動性」の尺度について注目してみよう。諸結果が必ずしも一貫していない本研究のなかでこの尺度のみは「父親－男子」「母親－男子」「父親－女子」「母親－女子」のいずれの間でも有意な相関係数が得られている。もっともその値はかなり低いが，この尺度が2項目のみで構成され，また，信頼性もかなり低い（.5前後）であることを考えれば，この結果は全く無意味とは考えられない。また，この結果が特に「両親－子ども」間のすべての組み合わせで有意な相関が得られた点は特に注目したい。なぜなら，両親から子どもに対して何らかの効果が働きそれが子どものある特性の発達に寄与しているとするならば，父母それぞれの家庭での役割，あるいは，一般に社会で望ましいとされているような性役割といった何らかの性に関わる影響が性差として結果に反映するはずだからである。しかし，ここにおいてそのような性差が見られないことは，この親子間での「情動性」の類似は，むしろ，遺伝的な要素が強い可能性が考えられるのである。大芦（1997）は，タイプAの「遺伝起源説」対「環境獲得説」に関する議論を概観し「(タイプAの）その基底となる気質的な部分は遺伝性が強く，……（中略）……成人期に達した後は気質に加え環境の影響から獲得された様々な行動がタイプAの特徴として加わってくる（p.173)」という説を提起している。本研究の「情動性」の尺度はまさにこの「気質」と近いものであり，遺伝の可能性の否定できない部分といえよう。なお，調査Bで用いた改訂尺度には，この「情動性」に相当する尺度のないことも付記しておこう。

## まとめ

本研究は，大学生（子ども）とその両親を対象として，そのそれぞれのタイプAを測定し，親子間での類似性を検討した。類似性はあまり高いものではなかったが，子どもとの類似性が

認められたのは父親よりもむしろ母親であった。また，女子の方が男子より母親との類似性がよりはっきりと認められた。ここに「母親－女子」間でタイプAの観察学習が成立している可能性が示唆されたが，母親が観察学習のモデルとなるという結果は必ずしも，先行研究の結果とは一致しなかった。また，タイプAの下位尺度のうち「情動性」に関しては，父母あるいは子どもの男女に関わりなく親子間での類似が認められ，これについては，遺伝の可能性も示唆された。

なお，本研究は，親子間のタイプAの尺度得点の相関係数を算出し，それらに解釈を加えることでタイプA発達のメカニズムを推測したものであるということを，念のため，断っておきたい。本稿で考察された事柄はあくまで推測の１つであり，親子間のタイプAが類似するに至るプロセスを直接確認し仕組みを明らかにしたものではないのである。従って，今後，この種の研究を行うに際しては，そのあたりの方法上の工夫がのぞまれるのである。

## 引用文献


Blaney, N.T., Blaney, P.H., & Diamond, E. 1989 Intrafamilial patterns reported by young type A versus type B males and their parents. *Behavioral Medicine*, 15, 161－166.

Bracke, P. E. 1986 Parental child-rearing practices and the development of type A behavior in children. Unpublished doctoral dissertation, Stanford University.

柏木恵子　1993　日本における母性・父性をめぐって　柏木恵子（編著）父親の発達心理学　東京：川島書店.

McCranie, E.W., & Simpson, M.E. 1986 Parental child–rearing antecedents of type A behavior. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 12, 493－501.

Matthews, K.A., & Krantz, D.S. 1976 Resemblances of twins and their parents in pattern A behavior. *Psychosomatic Medicine*, 38, 140－144.

Matthews, K.A., Stoney, C.M., Rakaczky, C.J., & Jamison, W. 1986 Family characteristics and school achievements of type A children. *Health Psychology*, 5, 453－467.

大芦　治　1995　タイプAの発達と両親の影響－両親の教育熱，学歴志向が子どものタイプAの発達に影響するか－　山崎勝之（編）　タイプAからみた世界－ストレスの知られざる姿－　現代のエスプリ　vol.337　至文堂　Pp. 186－193.

大芦　治　1997　子どものタイプA行動パターンに関する研究　倉敷芸術科学大学紀要，2，165－182.

大芦　治・岡崎奈美子・山崎久美子　1996　タイプA行動パターンの発達に及ぼす両親の学歴志向および養育態度の影響　発達心理学研究，7，41－51.

岡崎奈美子・大芦　治・山崎久美子　1995　TYPE　A行動パターン尺度の再検討　日本心理学会第59回大会発表論文集，56.

Yamasaki, Katsuyuki　1990　Parental child–rearing attitudes associated with type A behaviors in children. *Psychological Reports*, 67, 235－239.

Yamasaki, Katsuyuki　1994　Similarities in type A behavior between young children and their parents in Japan. *Psychological Reports*, 74, 347－350.

山崎勝之　1995　タイプA性格の形成過程　心理学評論，38，1－24.

山崎久美子・大芦　治・塚田豊弘　1994　タイプA行動パターン評価尺度の作成の試みとその検討　日本保健医療行動科学会年報，9，112－124.

付表１　タイプＡ行動パターン評価尺度（山崎・大芦・塚田，1994）の項目

| 「攻撃性を伴った話し方」 |
|---|
| 人の話を途中でさえぎることが多い　○ |
| 会話の主導権はいつも自分で握ろうとする　○ |
| つい声をあらげてしまうことがある　○ |
| 自分は気性が激しいと思う　○ |
| 会話をしていてついつい喧嘩をしているような口調で話してしまうことがある　○ |
| 人の話をせかしたくなることが多い　○ |
| 人から声が大きいと言われている　○ |
| ゆっくりと話をする人と会話をしているとイライラしてくる　○ |
| 早口である |
| 「敵意を伴った仕事熱心」 |
| 仕事，勉強などで人と競争して負けまいという気持ちをもちやすい　◎ |
| やる以上はかなり徹底的にやらないと気がすまない　◎ |
| きちょうめんである　◎ |
| 自分は勝ち気な方である　△ |
| 「情動性」 |
| 緊張しやすいたちである |
| 劣等感が強い方である |

注）○　改訂版尺度（付表２）の「短気と話し方」の尺度と共通する項目
　　◎　改訂版尺度（付表２）の「仕事熱心」の尺度と共通する項目
　　△　改訂版尺度（付表２）では「短気と話し方」の尺度に含まれた項目

付表2　改訂版タイプA行動パターン評価尺度（岡崎・大芦・山崎，1995）の項目

| 「気性の激しさ，短気，それに伴う話し方」 |
|---|
| 自分は気性が激しいと思う　○ |
| かっとなって怒りやすいたちである |
| つい声をあらげてしまうことがある　○ |
| 会話をしていてついつい喧嘩をしているような口調で話してしまうことがある　○ |
| 人の話を途中でさえぎることが多い　○ |
| 会話の主導権はいつも自分で握ろうとする　○ |
| 人の話をせかしたくなることが多い　○ |
| 自分は勝ち気な方である　△ |
| ゆっくりと話をする人と会話をしているとイライラしてくる　○ |
| 人から声が大きいと言われている　○ |
| 並んで順番を待つときはイライラしやすい |
| 待ち合わせをした相手が少しでも遅れるとイライラしてくる |
| 話をするとき大げさな身ぶり手振りをする |
| 「仕事熱心」 |
| 仕事熱心（あるいは，勤勉）である |
| 自分の仕事や行動に自信がもてる |
| 責任感が強い方である |
| やる以上はかなり徹底的にやらないと気がすまない　◎ |
| きちょうめんである　◎ |
| 物事をこなすスピードは早い |
| 仕事，勉強などで人と競争して負けまいという気持ちをもちやすい　◎ |
| 自分が正しいと思うことはどこまでもぬく |
| 日課を済まさないと落ち着いて眠れない |
| 「時間的切迫感」 |
| あわただしく毎日をおくっている |
| 毎日の生活で時間に追われている感じがする |
| 手帳を見ると予定がぎっしりつまっている |

注）○　旧版尺度（付表1）の「話し方」の尺度と共通する項目
　　◎　旧版尺度（付表1）の「仕事熱心」の尺度と共通する項目
　　△　旧版尺度（付表1）では「仕事熱心」の尺度に含まれていた項目

# Similarities in Type A Behavior Pattern between Children and their Parents
## —The Results of Two Surveys—

Osamu OASHI, *Kumiko YAMAZAKI

*Faculty of College of Liberal Arts and Science*
*Kurashiki University of Science and the Arts,*
*2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712, Japan*
**Department of Psychology, Tokyo Medical and Dental University*
*Kounodai 2-8-30, Ichikawa, Chiba, 272, Japan*

(Received September 30, 1997)

Type A behavior pattern (TABP) is said to be as a risk factor of coronary heart disease. However, little has been known about development of TABP. To examine the similarities between parents and children TABP is one way to investigate the developmental process of TABP.

Subjects were university students (children) and their parents. They were administered Type A behavior pattern assessment scale. Then correlation coefficient between parent's TABP and their children's TABP were computed. There were mild correlation between parent's TABP and children's TABP. Mothers were more correlated with children than fathers, and female children have closer association with mother than male children. These results suggest that there is a modeling of TABP between mothers and female children.